【小樽税務署長賞】

当たり前を支える「税」

小樽市立菁園中学校　二年

長谷川　このは

私たちは、生活のさまざまな場面で税金と関わっている。中学生の私でも特に関わりが深いのが消費税で、買い物をする時に目にしないことはないだろう。

逆に言えば、私たちはほとんど税と聞くと消費税をイメージしてしまう。税について理解が浅く、「払っているもの」という認識が強いせいで「どうして税金を払っているのだろう」と疑問に思ってしまうこともある。実際私も、接点があるのは警察や消防、医療関係だけのように感じていた。

しかし、最近になって私は、教科書の裏表紙に「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」と記載があることに気がついた。実は、公立の小中学校では、教科書はもちろん、体育用具や実験の器具など、様々なところで税金が使われているという。一年間に使われる税金は、中学生一人だけでも九十七万円以上。金額を見て衝撃を受けた。想像よりもずっと大きな額だったこともあるが、何より、それだけ税金に支えられていたのに知らずにいたことが衝撃的だった。

気になって調べてみると、他にも、ゴミの回収や処理、道路の整備、年金や介護サービス、森林を守る活動、公立の美術館や博物館、図書館のような施設、科学技術の研究など、身近なものだけでも色々な部分で税金が使われていることがわかった。

私たちの暮らしに深く関わる「税」。警察や医療から道路の整備に至るまで、あらゆる面で税金は使われている。当たり前のことだと感じるような日常も、税に支えられた上で成り立っているのだと改めて実感することができた。

何かを購入するとき、消費税を含めた代金を支払うように、私たちは日々税金を払っている。目先のそういった行動ばかり見てしまうことも多いが、同時に税があるからこそ「当たり前」が実現されていることを忘れてはいけない。税がどのようなものか、どのように使われているのかを知ることで、この先も当たり前を持続していけるのかもしれない、と私は思った。